戦国の世を駆け抜ける

日本史の戦国時代 ― 世界史の大航海時代

戦国時代：キーワード
- 下克上
- 群雄割拠
- 天下統一

戦国の世；応仁の乱(1467)〜大坂夏の陣(1615)
天皇・公家と武家の間の京都と地方とのバランスが破綻し、次のバランスを模索する過程。

中世でも近世でもない
単なる過渡、流動の時期

守人の世。大名の治乱興亡はなはなしく
技能(策略、武略)ある守人が優遇される…… 明智光秀、関ヶ原守人、真田幸村…
└宮本武蔵はNO、単なる武芸者

中央政府が機能せず、地方政権同志が
権力や所領などをめぐって対立、互に長らく
争いあった。

全国的規模の領国攻守戦が熾烈化し、
弱肉強食の果てに、伊達、北条、上杉、武田、織田
毛利、島津が強大になり、やがて畿内に近接する
有利な地理条件と濃尾地方の生産力、商品経済
の発展に恵まれた織田氏による畿内制圧に
続く、統一封建政権樹立の方向に進められるに至った。

封建制の完成のための凡ゆる準備が完了
したところに、戦国時代の歴史的意義を求める
ことが出来ると云える。

濃美平野にできた権力体が
われわれ現代社会の直接の素源
と云えるのでないか

幕藩制 → 明治国家 → 軍事国家 → 現代社会

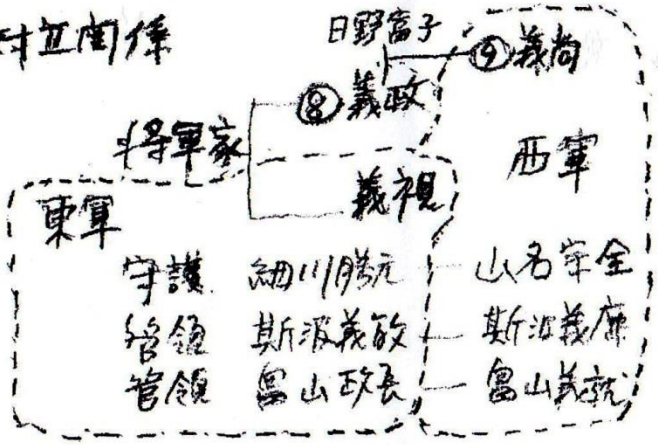
濃美三英傑
- 織田信長 — 鳴かぬなら殺してしまえほとときす
- 豊臣秀吉 — 鳴かしてみようほととぎす
- 徳川家康 — 鳴くまで待とうほととぎす

織田がつき、羽柴がこねし天下餅、坐りしままに食うは徳川。

第 27 回 東京トーク会
発 表 資 料
2018 年 5 月 23 日

応仁の乱（1467～1477）中世の終焉

対立関係



11年間の戦乱で京都は焼け野原

守護；幕府から任命され各国の武士を統率
管領；将軍を補佐，最高責任者として
幕府の諸機関を統率．
細川，斯波，畠山の3家より交代で任命．

室町幕府；守護大名の連合政権．

下剋上

守護，管領，公方に代って守護代，家臣，土豪が台頭し，戦国大名となっていく．

鎌倉上杉（関東管領） → 北条氏康
古河公方 → 北条氏綱
堀越公方 → 北条早雲

山内上杉（北関東） → 長尾（越後） … 上杉謙信（関東管領）

土岐氏 → 斎藤氏（守護代） → 斎藤道三（油売り）

京極氏 → 浅井氏（近江土豪）
→ 尼子氏（出雲 守護代） → 毛利（土豪）

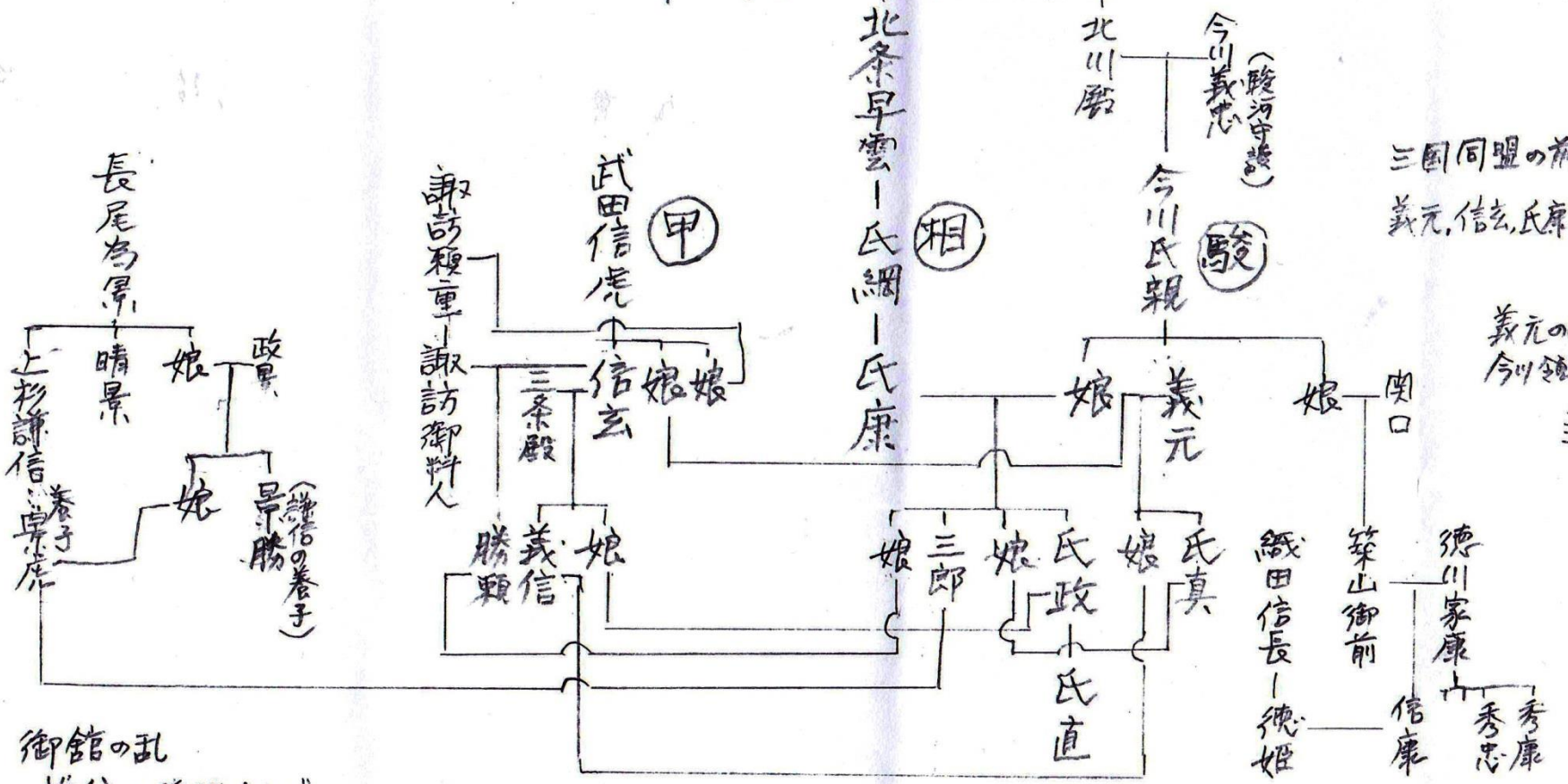
大内氏 → 陶氏（家臣） → 毛利

細川氏 → 三好氏（家臣） → 松永久秀（家臣）

斯波氏 → 越前；浅倉（家臣）
尾張；織田（守護代）… 織田信長

山城国一揆；守護畠山氏を追放し，国人が自治を行う
加賀一向一揆；守護富樫氏を追放し，百姓門徒が国中を支配する

甲・駿・相 三国同盟



三国同盟の前に甲・駿同盟が出来ていた。
義元、信玄、氏康は義兄弟になる。

義元の死で、弱体化した今川領に信玄は侵攻していった。
三国を破って

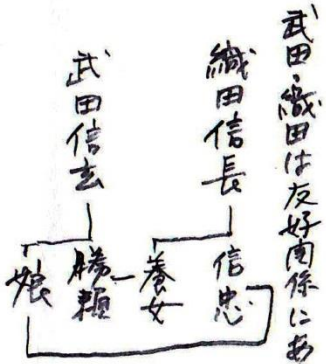
信玄の命令に逆らえない、家康は、武田へ内通の疑いをかけられた妻（築山御前）と長男（信康）を、泣く泣く死なせた。

御館の乱
謙信の後継をめぐって景勝と景虎が争い、景勝が勝って、後継者となる。

義信は親今川の姿勢を示し、信玄と対立、謀反の疑いで廃嫡（自刃）される。

氏政の代で、秀吉に屈従しなかったので大軍で小田原を攻められ降伏、北条氏滅亡した。

武田・織田は友好関係にあった

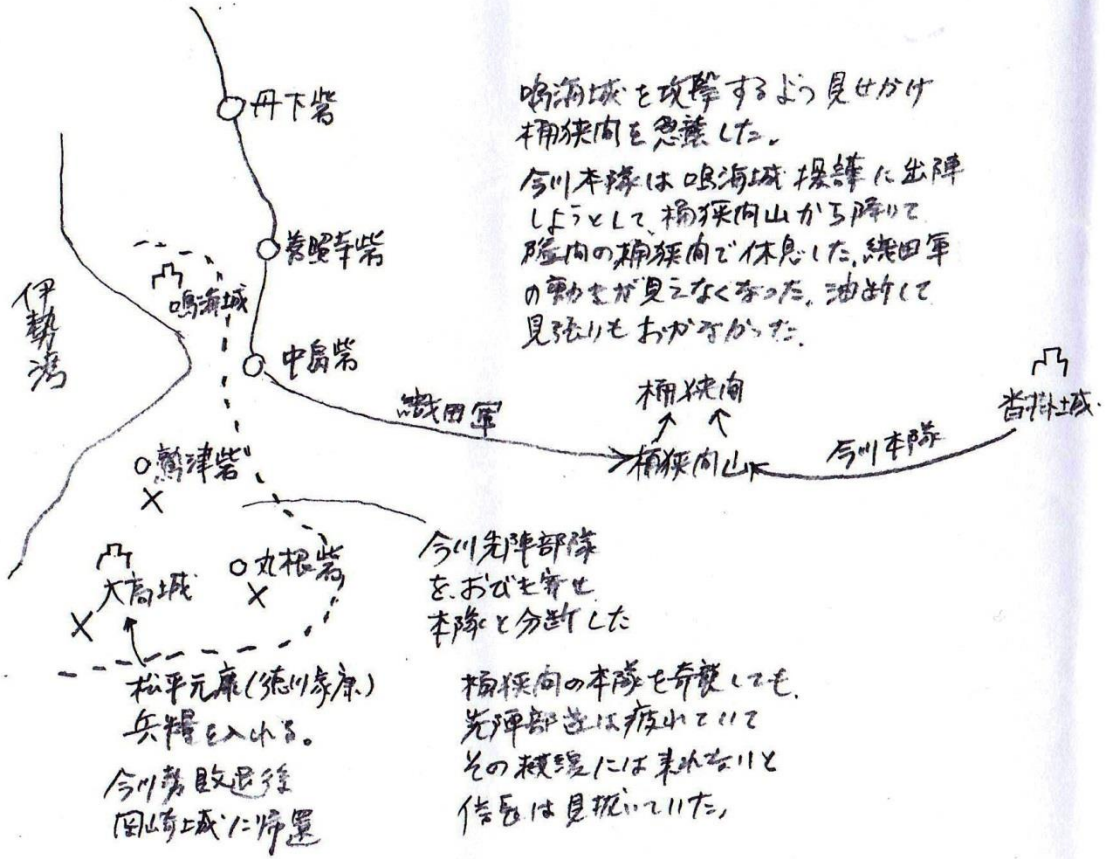


桶狭間の戦い(1560)　信長の正面突破戦法

信長は知っていた
孫子の兵法

- 千の力で万の敵を撃つ最善の策は狭い谷間(桶狭間)で戦うこと
- 正攻法で攻めるとみせて、敵の意表を衝く(急襲する)
- 行動困難な拠地(山間の隘路等)は速やかに通過せよ……義元は怠った。

織田軍の幸運
- 桶狭間一帯を豪雨が襲って織田軍が近ずいたのが今川軍にわからなかった。
- 強い海風が織田軍への追い風になった。



鳴海城を攻撃するよう見せかけ桶狭間を急襲した。

今川本隊は鳴海城奪還に出陣しようとして、桶狭間山から下降して隘路の桶狭間で休息した。織田軍の動きが見えなくなった。油断して見張りもおかなかった。

今川先陣部隊を、おびき寄せ本隊と分断した

桶狭間の本隊を奇襲しても、先陣部隊は残っていてその援護には来れないと信長は見抜いていた。

信長が好んだ唄

「人間50年、下天の内をくらぶれば
夢幻のごとくなり。一度生を得て
滅せぬ者のあるべきか」

人の世の50年の歳月は、下天の一日にしかあたらない、夢幻のようにはかないものだ。生れたものは、いずれ必ず死ぬ。

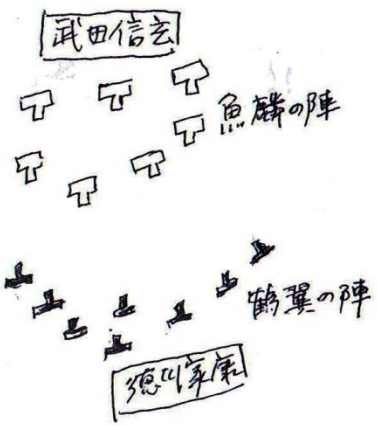
出陣にあたり、信長は死を覚悟していた。

「死のふは一定、思い草には何をしようぞ
一定語り起こすのよの」

誰でも死ぬと定っている、自分を偲んでもらうものとして何を遺そうか。後世の人々は、きっと語り起こしてくれるだろう。

三方が原の戦い(1572)

将軍義昭の要請により、西上途次の武田軍(25,000)が徳川軍[illegible]



敗れた徳川軍は浜松城まで撤退(逃げ帰る)
家康は城門を開放。追撃した武田勢は
計略、秋葉を危ぶみ、引返した。
武田勢が城に乱入していたら
家康の生命も危ぶまれたのでないか

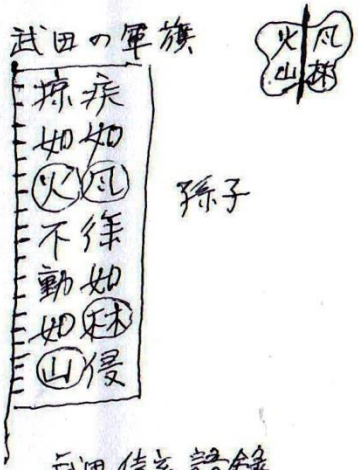
空城の計
(諸葛孔明)

この後、信玄の病(労咳)が悪化し
道なかばで陣没する。雄図空しく。
その死に際し、「明日は瀬田(京への入口)
に武田の旗を立てよ」と叫んだ。

武田軍は8割以上が農民の兼業兵
(兵農分離が出来てなかった)なので、
長期、長途の遠征は無理であった

家康の決断
かなわぬまでも対武田戦
にふみきった。
少々の小子ならこっぱ
強者の武田につくであろう。
つかぬまでも多少の動揺
はみせるであろう。
家康は愚直なまでも
律義で、信長との同盟
を守った。

武田の軍旗



孫子

武田信玄語録

人は城、人は石垣、人は堀、情は味方、仇は敵なり

織田信長、徳川家康の清洲同盟(1562)…20年維持
信長により、家康は最強の敵の武田氏との間の緩衝壁、
家康が武田氏との同盟をにおわせて、信長から
より強い支援を引き出した。→長篠の戦い

(中ロ、ロシヤにとり、太平洋進出を阻む位置にある
日本であり、日本・ロシヤの連携をにおわせて、米ロ
を牽制する?……日米同盟)

長篠の戦い(1575)
(設楽原の戦い)

奥三河の長篠城(徳川方)をめぐり、織田・徳川連合軍と甲斐から攻め寄せた武田勝頼軍との一大決戦。
馬防柵と鉄砲隊の威力で、織田・徳川連合軍が、精強な武田騎馬軍団を破った。

勇士、鳥居強右衛門
落城寸前の長篠城から脱出に成功、
信長、家康に援軍の要請を伝え、
帰路、武田方に捕われ、「援軍は来ない
と云え」と云われ、「援軍は来る」と
云ったので、処刑された。

織田・徳川軍の勝因
- 馬防柵の工夫で武田騎馬隊の突入を防ぎ、鉄砲を有効に使えた。
- 当日、梅雨明けの晴だったので、火縄銃が存分に使えた

武田軍の敗因
- 状況判断の誤り、堅固な陣城に無謀な突撃を繰り返した戦術的失態。
- 鉄砲の轟音で、騎馬隊が制御不能に陥った。

連続一斉射撃(三段射ち)はあったのか、無かったと考えられる
- 3,000挺の鉄砲を交替で1,000挺づつ一斉射撃するには、発射準備するあいだに生ずる隙時間を無くす必要がある。
- 1,000人で連続して一斉射撃するためには、もっとも準備の遅い者に合わせなければならない。
- 入りまじれて突撃してくる武田の騎馬隊、徒歩隊が同時に1,000挺の鉄砲の有効射程内に入るということは考えられない。
- 1,000人を同時に動かす号令をかけることは不可能。

本能寺の変（1582年6月2日）　なぜ光秀は信長を討ったのか？

考えられる要因

(1) 信長の構想の歯止めが必要、未来の危機に対する未然防止
日本国内統一後、国内は息子達にまかせ、諸武将は危険な海外（唐）へ派遣、国替へする。　後年、秀吉がトライした（朝鮮出兵）
海外国替へは一族滅亡となる。

(2) 信長の四国政策の急変
同盟（光秀が仲介）であった、長宗我部が信長の命令（四国は土佐一国にせよ）に反き、信長の長宗我部討ちをもたらした。面目をつぶされた光秀は謀反を急ぐことになった。
斎藤利三の要請もあり

(3). 信長の家康討ち
武田が滅び、徳川の武田への押えの必要が無くなった、
家康は危険人物、生かしておくと、自分が死んだ後に、
息子達がやられてしまうかもしれない（平清盛、源頼朝の前例）
同様に秀吉にとっても家康は危険人物だったはず、

信長の家康討ちの策
家康と穴山梅雪を駿河領から誘き出し
一網打尽に葬り、一気に駿河領に攻め
こみ、指揮権を失った駿河軍を降伏させる。

信長の関東見物といっての駿河領の軍事視察
（光秀、順慶、忠興同行）

5月28日
光秀、戦勝祈願で愛宕神社に参り、句会で
「時は今、あめが下なる五月かな」
土岐（明智）氏は今五月雨に叩かれているような苦境にある五月である

家康討ちの大義名文
家康が謀反を起こして自分を殺そうとしたので返り討ちにした。少人数で警護手薄とみせる本能寺に誘いこみ、光秀軍に討たせる。光秀軍、中国へ出陣のカモフラージュ。

光秀に手紙
一通のチャンス到来。
（信長、手薄で京都にいる）

中国へ出陣のはずの明智軍（13,000名）は老の坂（丹波、山城の国境）で中国方向でなく、京都へ向った。
明智の兵は、徳川家康謀殺のためと思っていたが、織田信長を討つためと知らされた。

家康討ちの計画を信長は光秀と相談、~~そのうち~~信長は光秀の謀反など思いもよらなかった。その後、光秀は家康と談合（細川藤孝、斎藤利三同席）同盟を結ぶ
信長の家康討ちの計画を家康に教えて
その命を救い、味方につけた。
家康の役割り、家康側で同行して
中国信忠を討つ。
東国織田軍を制圧する。

家康討ちの計画の逆手に取って
本能寺の変となった。
命令を受けた光秀が、家康ではなく
信長を討つことにすり替えた。

明智軍、本能寺襲撃。

信長は、光秀の謀反と聞いて
「是非に及ばず」
光秀かどうか確認無用

信長、最期の云葉
「余は余自ら死を招いた」

信忠は、脱出、逃げれる未
ことは可能（光秀は、信忠
が京にいることを知らない
ので本能寺と同時に襲撃
しなかった）だが潔よく
自刃した。

光秀が秀吉に破れ（山崎の合戦）て、三日天下に終った。

下工作、根廻し不十分。

2月に武田勝頼に謀反への協力、連携を申し入れたが、断られて無視された

- 細川藤孝の裏切り、藤孝が本能寺の変の前に光秀を裏切り、秀吉に就くことを決断。秀吉との同盟が出来ていた、それ故、変の情報が流れて、秀吉は光秀の謀反を知っていた。
- 戦力とみていた筒井順慶が、秀吉のにせ情報により、本能寺に来なかった。
- 畿内の有力軍（高山右近、中川清秀…）を味方に出来なかった。
  中川清秀…秀吉の「信長は生きている」のにせ情報。
  高山右近…イエズス会より説得された
  頼りにしていた信長を殺した光秀に味方するな。
- 変の後、中国の毛利陣への密書が届かず、使者が秀吉陣に捕ってしまい、それが秀吉の「中国大返し」につながった。
  「中国大返し」は秀吉は計画済みで、毛利軍の追撃は無かった。
  光秀の予想外に早かった。
- 大坂に居た、四国征討軍の織田信孝を討たなかった。
  信孝は秀吉の光秀討ちの大義名文となる（親の敵）
  信孝を討たないまでも、本能寺に「仇敵、信長を
  討った、味方をしてくれ」と云え、門徒衆を立上る計算が出来たはず、

戦乱の戦国時代年譜

1467 応仁の乱

1477 群雄割拠，下剋上の世になる

1485 山城の国一揆　守護畠山氏を追放し，国人が自治を行った。

1488 加賀一向一揆　守護富樫氏を追放し，百姓（門徒）が国中を支配した。

1495 北条早雲，小田原城を占領，伊豆を制圧し，相模も切取る。早雲；今川氏の縁戚
もとの姓は伊勢氏，氏綱の代に北条へ改姓，鎌倉幕府の執権北条氏にちなみ，相模支配の正当性を主張

幕府守護体制の崩壊，幕府の有名無実化，
社会秩序の崩壊，世情不安定の中で，守護大名に代って新しい秩序と独立した領国を打ち立てることに成功した戦国大名といわれる地域権力者が全国各地に台頭した。

東北；伊達，最上，蘆名
関東；武田，北条，佐竹，今川
北越；長尾（上杉）
京畿；三好
畿内周辺；浅井，浅倉，織田，松平（徳川）
中国；浦上，宇喜田，大内，尼子，毛利
四国；長宗我部，十河
九州；竜造寺，有馬，大友，島津

1543 鉄砲伝来，ポルトガル→種子島，鉄砲製造：堺，近江国友，紀伊，根来

戦乱の戦国時代年譜

歴史の流れ
◎：分部奥

1546 川越夜戦　北条氏康8000の寡兵で2万の管領上杉軍、古河公方軍を夜襲で破り、関東の覇者となる。
撤退とみせかけて

1549 サンフランシスコ・ザビエル来日し、キリスト教を伝える。

1552 斎藤道三、守護土岐頼芸を追放し、美濃の国を乗っとる。

1553 甲・駿・相、互に婚姻関係を結ぶことで三国同盟成立。

1555 厳島の戦い、毛利元就 4000の寡兵で2万の陶晴賢の大軍を奇策、奇襲で破り、西中国征覇の足掛りとする。
(海の桶狭間)　三本の矢。

1556 ◎長良川の戦い、斎藤道三、息子義龍との戦いで敗死。義龍が長生きしていたら、信長は美濃の国盗りに手間取り、戦国時代の歴史が大きく変っていたかもしれない。

1560 ◎桶狭間の戦い　織田信長、正面奇襲戦法で今川義元を破り、東からの脅威を無くす。

1561 川中島の戦い(第4次)、大会戦で引分け。武田軍 6,000、上杉軍 3,000 戦死。

1568 織田信長、足利義昭を奉じて上洛を果たす。

1572 ◎三方ヶ原の戦い、徳川軍 10,000(織田援軍 2,000)、武田軍 25,000。徳川軍、果敢に挑戦するが大敗。この後、武田信玄の病が悪化、死亡。

1573 織田信長、足利義昭を京都から追放。15代、240年続いた室町幕府滅亡。

1575 長篠の合戦　織田・徳川連合軍、鉄砲の威力で無策の武田軍を破る。武田弱体化する。

1577 手取川の戦い、織田軍(柴田勝家)、上杉軍に完敗。上杉の脅威が織田に迫る。

1578 耳川の戦い、九州の覇権をかけて、島津と大友が戦い、島津が勝ち、九州の覇権を一挙に握る。
└キリシタン大名、キリスト教による理想の国家を夢見ていた。

1578 ◎上杉謙信、上洛直前に急死(脳卒中)。全国征覇をめざす織田信長、大きな脅威から逃れる。

1582 ◎本能寺の変　織田信長の死、羽柴秀吉、中国大返し、山崎の戦いで明智光秀を破る。光秀、三日天下

1583 ◎賤ヶ岳の戦い、羽柴秀吉、柴田勝家を破り、信長の後継者の地位を決定づける。

1584 小牧・長久手の戦い。徳川家康、羽柴秀吉と対峙に戦う。部分的には勝利。

1584 長宗我部元親、四国全土を征覇、一領具足、後に秀吉の四国征討軍により、圧倒的な敗れ、土佐1国になった。

1587 秀吉、九州の島津を平定、島津を臣従させた。

1590 秀吉、小田原の北条氏を滅ぼし、さらに奥州を平定し、8年で全国統一をなしとげた。

1589 摺上原の戦い、伊達(政宗)が蘆名を破り、南奥羽の覇権を握り、ひそかに天下をねらうが、結局、秀吉に臣従する。

1592 秀吉、朝鮮出兵
1597 文禄、慶長の役。

1598 秀吉の死。徳川家康、天下取りの野望をあらわす。

1600 ◎関ヶ原の戦い　家康、三成に勝ち、天下人となる。小早川秀秋の裏切り、吉川、毛利、長宗我部の不義がなければ?

1615 ◎大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。　真田幸村、家康本陣に突入、家康危うし、家康、死を覚悟
伊達政宗、との密約